



相ノ木っ子だより

令和元年度
学校だより
12月号
上市町立相ノ木小学校

恥ずかしさの向こう側

「も一っと高く、も一ーっと高く」「はあー、どすこいー、どすこい」

学習発表会で、子供たちの堂々とした、そして生き生きとした演技が繰り広げられました。手振り身振りを交えて元気よく演じた1年生の音読劇。ランウェイで自分の作った帽子を素敵に披露した2年生のファッションショー。一生懸命に体を動かして料理を再現した3年生の表現運動。ユーモアとチームワークが溢れる4年生の合唱・合奏と相撲甚句。心に残る思い出をランキング形式で届けた5年生の3大ニュース。心も体も弾けてダイナミックに魅せた6年生のダンス。どれも、観ている保護者や家族の皆さん、他の学年の子供たちがじっと見入るおもしろさ、迫力がありました。



事前にリハーサルで演技を見ていたわたしも、本番でさらに改善され、工夫が加えられた発表を飽きることなく、楽しく観ることができました。そこには、自分の演技や役割に集中し、没頭している子供たちの姿があり、一人一人の意欲とがんばり、指導された担任の先生方の努力にうれしさを感じました。何より、子供たちが率先して動き、友達と協力し、楽しんで演じていたことにとっても感嘆しました。大勢の方が観ている本番では、きっと子供たちは緊張していたでしょうし、恥ずかしさも多分にあったことと思います。ですが、それを乗り越え、演じることを楽しめるようになっていました。そんな境地に立った演技であったからこそ、観ている人に何らかの感動を与えることができたのだと思います。

イギリス人俳優のジョン・ギールグッドさんは、演じることについて次のように言っています。

演じるということは、恥が半分、光栄が半分である。

自身をさらけ出すときは恥であり、

自身を忘れられるときは光栄である。

子供たちは、本当に楽しそうに、そして堂々としていました。自身をさらけ出す恥を楽しみ、自身を忘れるほどの熱意で演じていたと思います。これまで何度か子供たちの自己表現力を課題として挙げてきましたが、今回の子供たちの表現力、メンタル面でのたくましさは、どの子も着実に、素敵な成長をしていることを実感させてくれました。恥ずかしさというものをばねにし、それを乗り越えることで新たな自分というものを生み出してきているように思います。



アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクト氏は、著書「菊と刀」で、西洋文化は自律的な「罪の文化」であり、日本文化は他律的な「恥の文化」とであると定義しています。西洋では、神と向かい合って自発的に善悪を判断しますが、日本では、社会の人々の視線を感じ取り、世間体によって善悪を判断するというものです。来日したこともないルースさんの定義に批判的、否定的な人もいますが、わたしは的を射ていると思います。日本人は、犯した罪の内容よりも、罪を隠したり罪への意識がなかったりすることを問題視しがちです。「人様に恥ずかしくないのか」「恥知らず」といった道徳的な判断基準が日本人にはあります。これは、公共マナーや公衆道徳をしっかり守るといった日本人のよさを生み出す反面、多数の考えに流されたり判断が他人任せだったりする短所になったりします。しかも最近は、「恥知らず」であることに平気な人が増えている気がします。

人の考えに流されずに自分で判断し、自分をきちんと表現し、誰からも恥ずかしいと言われない言動をとる日本人でありたいものです。そのためには、「恥ずかしさを乗り越える」「恥ずかしいことだと意識する」といった、「恥」というものをどう捉え、自分の中でどう昇華していくかが大切ではないでしょうか。

相ノ木っ子のみんな、恥ずかしさの向こう側には何があるのかな？もっともっと行ってみよう！



形や色から感じる事



上の2枚の画像をご覧ください。左は、少し雪化粧した剣岳と絨毯のように紅葉した低山を撮った写真です。白と黒、オレンジとグリーンの色のコントラストが美しく、初冬の象徴のように感じました。また、右は、葉が落ちたグラウンドのハナミズキの枝を真下から見上げたものです。太さや遠近の違う枝が複雑に絡み合っているように見え、摩訶不思議できれいな模様を成していました。

11月6日、本校で小学校教育課程研究集会図画工作科部会を開催しました。1年生は新聞紙を材とした造形遊び「へんしんぶんし」、6年生は学校の思い出深い場所を絵画に表す「わたしの大切な風景ー伝えたい相ノ木小の思い出ー」の研究授業をしました。1年生の子供たちは、新聞紙を丸めたり、ちぎったりしながら、嬉々として新聞紙を変身させていました。また6年生は、学校への思いを表せるよう、色の選択や塗り方を工夫しながら絵を描いていました。今年度学校では、図画工作科を通して、子供たちの形や色への見方・感じ方を育み、自分の思いを大事にした造形活動に取り組んできました。研究授業での1年生と6年生の姿には、その積み重ねが表れていたように思います。参加された他校の先生方も、子供たちの素直で、一生懸命な姿をととても褒めてくださいました。

さて、2枚の画像は少々見づらくて申し訳ないのですが、皆さんはどう思われたでしょうか。わたしは、それぞれに色の清々しさや形の面白さを感じましたが、形や色を見て人が感じることは様々ですし、まず形や色に着眼するかどうかはその人次第です。子供たちにも、同様のことが言えます。前述の研究集会で、講師の先生は「子供一人一人の感じ方は違って、伝えたいことも違う。そのことを常に念頭において授業してほしい」と話されました。今後もそれぞれの感性の違いを捉え、子供たちの伝えたい思いを大切にして支援していきたいと考えます。そして大事なことは、子供たちが身の周りのものに造形的な見方・感じ方をするかどうかであり、そういった感性を自分の中に育てているかどうかということだと思います。

小説家の司馬遼太郎さんは、時代小説「峠」で「離れると、物が見やすい」と言っています。細かなことばかりにとらわれず、大局的な視点で見た方が物事の本質が分かってくるということです。また、「鳥の目・虫の目・魚の目の3つの目」とよく言われます。「広く俯瞰で」「細かなことを多角的に」「時代の流れを捉えて」状況に応じて見方を変えることが成功につながるということです。これらは、形や色に限らず、ものへの見方、視点のもち方について述べられたものですが、造形的な見方・感じ方に関してももちろん言えることでしょう。そして何より、「きれいだ」「すてきだ」といった子供たちの美的な感性を養うことがとても重要だと思います。

美しい風景を心の中に宿す人は美しい

これは、作家立松和平さんの著書「美しいものしか見まい」での言葉です。風景に美しさを見出せる感性は、とても素敵で、美しいものなんですね。さらに立松さんは、「美しいものという基準は人によって異なり単純ではない。ただ、人の心を強く引きつけ、高揚させるようなものは美しいといえる」と言っています。日々の生活や生き方等を通して、自ら美しい存在になるように感性を研ぎ澄ませていくことは、もっともっと美しいことなのでしょう。

また、画家の平山郁夫氏は、「ぶれない」で次のように言っています。

わたしの基準は「美しいかどうか」だ。

美しいものには「力」がある。

生きものは「美しいとき」ほど盛んに生き、栄える。

美しくないものは、たとえ一時的に目を奪っても長く輝き続けることはできない。

美しい風景に接し、美しい絵画や音楽に触れ、情感あふれた人々と交流してこそ、その人自身の美しさが生まれるのでしょう。右上の写真は、4年生の男の子が折り紙で作った素敵な生き物たちを職員室前廊下に飾ってくれたものです。細部まで見事な出来栄に驚き、進んで飾ろうとする気持ちに感謝するとともに、これからも子供たちの造形活動を支援し、形や色からいろんなことを感じてほしいという思いを強くしました。



行事予定(12月中旬～1月中旬)

12月23日(月) 地区児童会
24日(火) 第2学期終業式
下校 13:15
25日(水) 冬季休業開始(～1/7)



1月 1日(水) 元日
8日(水) 第3学期始業式
校内書初大会
13日(月) 成人の日

